

## 学会・シンポジウム報告

## 第53回 国際食肉科学技術会議に出席して

服部 昭仁

北海道大学大学院農学研究院

2007年8月5日から9日まで、北京で開催された第53回国際食肉科学技術会議に出席した。

札幌からの直行便が限られているため、8月4日午後、千歳ー北京直行便で北京空港に到着したのは、午後4時過ぎ。心配していた暑さより霧とは明らかに異なる大気の不透明感が気になる。太陽は日の入りまで未だ相当あると思われる高さにも関わらず、夕日の鮮やかさとは異なる赤色を呈していた。中国だから、日中から太陽が赤いということではしゃれにもならないが、スモッグ(日本では懐かしい言葉になっています)のせいで太陽が薄ぼんやりとしていることは否めない。4年前に訪問した時に比べても大気汚染は確実に進んでいるようだ。空港からホテルまでの行程で高速道路や高層ビルの建設など来年のオリンピックに向けて国を挙げての準備の様子が伺える。約40年前の東京オリンピック前後の日本の状況と同様(筆者が当時の東京の様子を直接眼にしているわけではないが)で、発展途上国の経済成長が一挙に高まる際にはやむを得ない現象なのかも知れない。ホテル到着後、その日のうちにRegistrationを終える。翌日は、Welcome Partyまで自由行動なので、故宮見物。主要な建物が3棟ほど工事中、これもオリンピックの準備か? 会議場近くのオリンピックスタジアムも工事中。未だ、骨組みだけしかできていないと思いきや、外観に関してはこれが完成像とのこと、北京市民が「鳥の巣」と称しているとのこと、「言いえて妙」である。

さて、肝心の国際会議、Welcome Partyの開始時間と共に各国の参加者が集まってくる中、日本からの出席者も目立つ。つい4ヶ月あまり前に日本食肉研究会の大会でお会いしたばかりのメンバーも外国で会うと妙に懐かしく、日本人中心でテーブルを囲む。直ぐに飲み物・食べ物が無くなり、物足りないのがWelcome Partyの常と思っていたが、予想に反して飲食物が多く、十分満腹感を覚え、さすが豊かな食文化を有する中国と感心すると共に翌日からのDinner Timeへの期待が膨らんだ。しかし、翌日のDinnerは、日中の激しいスコールのため、夕方北京市内の道路の排水障害

により、送迎バスが激しい交通渋滞に巻き込まれ、会場までの所要時間が2時間半以上(通常は30分以内)を要し、夕食会場は座る席もない混乱状態であった(北京オリンピックは大丈夫?)。

6日、いよいよ会議が開始される。会議の数日前にHP上で明らかになったように日程が一日縮小されている。直前の日程変更により多くの参加者が戸惑いを示しているように感じられた。文字通りの朝令暮改、当日のスケジュールの変更は、会議開催期間中頻繁に行われ、且つその情報が参加者に十分伝わるような仕組みになっていなかった。Message Boardが用意されていない、受付カウンターに英語の話せない学生しかない、各部署に責任者が配置されていない、企業展示に広い場所を割いたためかポスターセッションの会場が非常に狭いなど運営面で多くの不都合が目立ったが、これもお国柄なのか? 果たして来年のオリンピックはスムーズに運営されるのかここでも心配になったが、同時に1999年に横浜で開催された第45回本会議の運営の見事さがあらためて思い出された。

学術的な会議としての内容は、*Meat Safety*, *Meat Production*, *Muscle Biochemistry*, *Meat Quality and Nutrition*, *Meat Processing and Packaging*, *Meat products and consumer topics*の6つのセッションで構成され、それぞれのセッションにおいて2-4件のKeynote Addressと多くのポスター発表がなされていた。残念ながら今大会ではKeynote Addressの演者は日本から選出されなかった。

会議への参加者は表1のように41ヶ国454名(同伴者78名を含む)、日本からの参加者は、27名(同伴者2名を含む)であった。日本からの参加者25名は開催国中国を別にすれば韓国、アメリカに次ぐ数である。なお、今後の開催国に付いては、2008年9月7-12日の予定で南アフリカのCape Town、2009年は8月17-23日の予定でデンマーク、2010年は韓国、2011年はベルギー、2012年はカナダ、2013年はトルコ、2014年はウルグアイの予定であることが明らかにされたが、2011年以降は未だ流動的である。特に、カナダ、トルコ、ウルグアイについては開催が難しい意向が述べられた。

以上、雑駁な報告になったが、アジアで2度目の開

催である今回の会議では、日本からの参加者も多く、会場のあちこちで国際交流する日本人の姿が目立ったが、全体会議等の議論の場では、発言が特定の人に限

定されているようにも感じられた。そのような中で、地元、中国からの参加者の積極的な姿勢が印象に残った会議であった。

表1 国別参加者数(名)

アルゼンチン	3	メキシコ	2
オーストラリア	4	オランダ	5
ベルギー	4	ニュージーランド	4
ブラジル	4	ノルウエー	13
ブルガリア	1	オマーン	1
カナダ	7	ポーランド	9
チリ	1	ロシア	2
中国	100	サウジアラビア	2
クロアチア	2	セルビアモンテネグロ	2
チェコ	3	南アフリカ	5
デンマーク	11	スペイン	19
エストニア	1	スウェーデン	11
フィンランド	4	スイス	1
フランス	8	台湾	20
ドイツ	7	タイ	10
アイルランド	4	トルコ	3
イラン	1	イギリス	6
イタリア	8	アメリカ合衆国	28
日本	25	ウルグアイ	5
韓国	35	オーストラリア	2
リトアニア	2		